宇治拾遺物語

児のかい餅するにそら寝したること

これも今は昔、❶比叡の山に❷児ありけり。僧たち❸宵のつれづれに、「いざ、かい餅せん。」と言ひけるを、この児心寄せに聞きけり。さりとて、し出ださんを待ちて、寝ざらんもわろかりなんと思ひて、片方に寄りて、寝たる由にて、出で来るを待ちけるに、すでにし出だしたるさまにて、ひしめき合ひたり。

これも今となっては昔のことだが、比叡山に稚児がいた。僧たちが宵の所在なさに、「さあ、ぼた餅を作ろう。」と言ったのを、この稚児は期待して聞いていた。だからといって、できあがるのを待って、寝ないでいるのもみっともないだろうと思って、部屋の片隅に寄って、寝たふりをして、できあがってくるのを待っていると、どうやらもうできあがったようで、がやがやと騒ぎ合っている。

この児、定めておどろかさんずらんと待ちゐたるに、僧の、「❹もの申し候はん。おどろかせたまへ。」と言ふを、うれしとは思へども、ただ一度にいらへんも、待ちけるかともぞ思ふとて、いまひと声呼ばれていらへんと、念じて寝たるほどに、「や、な起こしたてまつりそ。幼き人は寝入りたまひにけり。」といふ声のしければ、あなわびしと思ひて、いま一度起こせかしと、❺思ひ寝に聞けば、ひしひしとただ食ひに食ふ音のしければ、すべなくて、無期ののちに、「えい。」といらへたりければ、僧たち笑ふこと限りなし。

〈出典『日本古典文学全集28　宇治拾遺物語』（小学館、一九七三年）〉

この稚児は、きっと起こしてくれるだろうと待っていると、僧が、「もしもし。お起きなされ。」と言うのを、うれしいとは思うけれども、ただ一度で返事をするのも、待っていたのかと思われるのではないかと、もう一度呼ばれてから返事をしようと、我慢して寝ていると、「おい、お起こしなさるな。幼い人は眠ってしまわれたのだ。」という声がしたので、ああ困ったと思って、もう一度起こしてくれと、思いつつ寝て聞いていると、むしゃむしゃとひたすら食べに食べる音がしたので、どうしようもなくて、ずっとあとになってから、「はい。」と返事をしたので、僧たちは大笑いしてしまった。

※1「ワロウ」または「ワラウ」と読む。

❶**比叡の山**　比叡山。京都府と滋賀県の境にある。ここでは、比叡山延暦寺のこと。
❷**児**　学問や行儀作法を習うため、寺院に預けられていた貴族や武士などの子弟。
❸**宵**　日没から夜中までの時間。
❹**もの申し候はん**　丁寧に呼びかける言葉。もしもし。
❺**思ひ寝**　何かを考えながら寝ること。